



Title	日本語学習者の漢字辞書使用ストラテジー : 初級者と上級者の事例研究
Author(s)	伊藤, 早苗; Ito, Sanae; 鈴木, 正子 他
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 5, 64-86
Issue Date	2001-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45621
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC005_006.pdf



日本語学習者の漢字辞書使用ストラテジー

－初級者と上級者の事例研究－

伊藤 早苗・鈴木 正子

要 旨

本研究の目的は、日本語学習者が漢字辞書使用においてどのようなストラテジーを使用しているかを明らかにすることである。調査者らは、漢字辞書使用ストラテジーを漢字学習ストラテジーの一種として定義し、特に困難点への対処のしかたに注目して、初級、及び、上級の学習者の事例を考察した。調査方法は、初級者に対して、未習の単漢字と未習の漢字熟語の検索課題を課し、上級者に対しては、未習語を多く含む文章を母国語に全訳する課題を課した。それぞれの課題実行中の検索行動をビデオで録画し、事後インタビューを録音と録画をしたものを資料とした。初級レベル内では、課題の達成度の高いものと低いものの漢字辞書使用ストラテジーの差異を分析した。また、上級学習者に使用された漢字辞書使用ストラテジーの特徴を考察した。調査の結果、漢字辞書使用において熟達度の高い初級学習者に見られたストラテジーは、漢字検索方法の正当さを判別して検索方法の変更を頻繁にする、漢字辞書使用についてメタ認知している、の2点であった。また上級者に見られた漢字辞書使用ストラテジーで特徴的であったのは、漢字の読みを手がかりにして未知の漢字語彙を検索する、電子辞書を含む多様な辞書を使いこなす、文脈と意味の照合を重視する、の3点であった。

〔キーワード〕 漢字学習ストラテジー、漢字辞書使用ストラテジー、メタ認知、文脈と意味の照合、電子辞書

1. はじめに

北海道大学留学生センターでは初級学習者を対象にした研修コースにおいて、漢字運用能力の養成を目標として、漢字辞書を使って漢字語彙を検索する活動を取り入れている。この漢字学習活動は柳町 (1999)、及び、Yanagimachi (1999) が提唱する「漢字運用能力」の向上を目標としている。漢字辞書を使用した学習活動を実施する中で、学習者によって辞書使用上

の習熟度に差が見られたことから、調査者らは困難となる点を把握する必要を感じ、辞書検索行動の実態調査を行ない、困難点を明らかにしてきた（鈴木・伊藤 1999a,b、伊藤・鈴木 2000c）。ところが、これらの困難点に対し、学習者によっては困難点を乗り越える方策を持たず検索を放棄してしまう例もあれば、いろいろな方策を用いて漢字検索を達成する例もあり、学習者間の違いが見られた。そこで本稿では、初級レベル内において習熟度の異なる学習者の漢字辞書使用ストラテジーの差異の検討を事例研究として行う。さらに、上級学習者の辞書使用の特徴を明らかにすることにより、漢字辞書検索の困難点を乗り越える漢字辞書使用ストラテジーを考察する。

2. 漢字辞書使用ストラテジー

2.1 学習ストラテジーとしての漢字辞書使用

漢字辞書使用を漢字学習ストラテジーの中に位置づける観点とは、漢字学習ストラテジー使用実態調査の項目に挙げられ（大北 1995、中村 1997）ていることに見られる。これらは質問紙による学習者の意識調査という調査方法をとったものである。それらの結果によると、初級学習者において漢字辞書使用は漢字学習ストラテジーの上位項目にはあげられなかった。しかし、大北（1995）は、学習レベルが高くなるにつれて順位があがることを指摘している。また、中村（1997）は、漢字学習ストラテジーは授業形態に影響を受けている可能性があることを指摘している。

横須賀（1999）はオックスフォード（1994）の学習ストラテジーの分類による直接ストラテジーの分類に沿って、語彙と漢字の学習ストラテジーを考察している。その中で、記憶ストラテジーを「体制化」「連想」「文脈」の3項目に分けて論じている。「体制化」とは漢字の形態的特徴を分析し、一文字としてのまとまりに体系化し、意味を基準として既習漢字や、既習熟語を体系化して記憶することである。「連想」は「ある情報と別の情報を関連づけ」ることであり、「文脈」は「連想・体制化の一種で」、文脈の中で意味を理解することによって記憶の処理水準が深くなり、記憶が定着しやすくなる、としている。

横須賀（1999）の上述の記憶ストラテジーの分類においては、漢字辞書使用は論じられていないが、漢字辞書による検索のためには漢字の形態的特徴、あるいは、読みの認識が必要となることと、文脈と意味の照合が必

要となることから、「体制化」、及び、「文脈」使用を伴う記憶ストラテジーの具体的な行使を伴う学習活動であると言える。従って、漢字辞書使用に習熟することは、漢字の記憶の定着を促す漢字学習ストラテジーの一部を構成すると考えられる。

2.2 漢字辞書使用上の困難点

調査者らは、学習者にとっての漢字辞書使用の困難点を調査し、単漢字検索の場合は多くが漢字パターン認識に関するものであることを明らかにした(鈴木・伊藤 1999a, b)。また、漢字熟語検索においては、漢字パターン認識上の困難点に加え、接辞の認識、文脈との照合、一字単位のまとまりの認識、辞書の熟語の記載法などが問題となることがわかった(伊藤・鈴木 2000c)。ところが、これらの困難点に対し、学習者によってはそれを乗り越える方策を持たずに検索を放棄してしまう例もあれば、いろいろな方策を用いて漢字検索を達成する例もあり、学習者間の違いが見られた。

2.3 「つまずき」と「乗り越え」

漢字辞書を使用するためには困難点を乗り越える必要がある。そこで、本稿では困難点への対処の仕方を「つまずき」の「乗り越え」という用語で表す。以下に本稿での定義を記す。

「つまずき」とは漢字を辞書で検索する際に、達成できなかった検索行動であると定義する。ここでは、検索方法は間違っている、相互参照によって検索が達成できた場合はつまずきとは見なさない。単漢字検索でのつまずきは要因によって、1. 字形認識に関するもの、2. 部首に関するもの、3. 読み方に関するもの、4. 辞書の構造に関するものに分類される(鈴木・伊藤 1999a, b)。

また、熟語検索におけるつまずきの要因は上記の1～4に加えて、1. 熟語の構成に関するもの、2. 文脈と意味の照合に関するものの2つがある(伊藤・鈴木 2000c)。熟語を構成する単漢字の検索手順は正しくても、検索した漢字を親字とする記載項目に当該熟語がない場合は、学習者の誤りとは言えないが、これもつまずきとして扱った。

「乗り越え」とは「つまずき」に対処し、検索を達成することである。そのためには、つまずきの要因を認識し、検索方法を吟味して、検索方法を改めるという過程が必要である。

2.4 漢字辞書使用ストラテジー

本稿では、学習者の漢字辞書使用のための方略を「漢字辞書使用ストラテジー」という用語で表す。これは、学習者がどのように辞書を選択し、つまづきを乗り越えたり、回避したりするか、などの漢字検索行動における漢字辞書使用方略を指す。

3. 研究の目的

本稿では辞書検索行動を観察し、漢字辞書使用ストラテジーの実態を、明らかにする。そのため次の2点に焦点をあてて、初級学習者を対象とする調査1と、上級者を対象とする調査2を行う。

- (1) 初級学習者の中で、漢字辞書使用の習熟者と非習熟者は、漢字辞書使用ストラテジーがどのように違うか。
- (2) 上級学習者は、どのような漢字辞書使用ストラテジーを使用するか。

横須賀(1999)は、学習をとりまく環境(教材・教授者・学習者要因)と、漢字の属性(象形、介意、形声・・・)によって学習者のとる学習ストラテジーは異なることから、一律にアンケートによって意識調査するという方法の限界を指摘し、多様な要因とストラテジー使用の実証的調査が必要であることを示唆している。本調査では、以下に述べる方法で漢字辞書使用ストラテジーを観察し、事例の質的な分析を行い、また、事後インタビューでの学習者の発話プロトコルを分析することで、実証的調査とする。

3. 調査1：初級レベルにおける学習者間の差違

調査1では、漢字辞書使用ストラテジーを明らかにするために、前回の調査対象者9名の中から達成度において対照的な学習者2人に焦点をあて、考察する。

3.1 調査の方法

3.1.1 調査の対象

調査の対象は研修コース終了直後の非漢字圏学習者2名である(表1)。

表1. 調査1の対象者のプロフィール

学習者	母 語	母国での日本語学習歴	使用 辞 書
A	スペイン語	無 し	『新漢英辞典』 ²⁾ “Progressive Japanese-English”
B	ミャンマー語	初級前半程度の学習歴有り	『新漢英辞典』

この2名の在籍した研修コースとは初級レベルの全18週の集中コースである。プレースメントテストの結果、Aは研修コースのうち学習歴のないものを対象とするクラスに在籍し、Bは学習歴のあるものを対象とするクラスに在籍した。漢字学習の教材は共通である。漢字学習の詳細については鈴木・伊藤 (1999b)、伊藤・鈴木 (2000c) を参照されたい。

3.1.2 課題

学習者に以下の2種類の課題を課し、その間の検索行動を観察した。

- 1) 単漢字検索課題：『新漢英辞典』を使用して、文脈の伴わない未習の漢字を検索する (図1)。

<p>問題1. 下の漢字の Entry number と意味を例のように書いてください。</p> <p>例：血 3526 (blood)</p> <p>①別 ②妄 ③爪 ④懸</p> <p>⑤存 ⑥片 ⑦威 ⑧鳥</p>
--

図1. 単漢字検索課題

- 2) 熟語検索課題：短文中の漢字語彙の中でわからないものの意味を調べる (図2)。

問題 2. 下の文の中で知らない漢字の言葉について、読み方と意味を例のように書いてください。

例：あの人は誰ですか。

だれ (who)

- ①お金を借りるときは、返済できる金額にしなければいけない。
- ②炊事の道具はどこにありますか。
- ③先生のお宅へうかがうときは、連絡してからのほうがいいです。
- ④雪が降ったので、今日この道は渋滞しています。
- ⑤あの人は無資格なのに学校で教えています。
- ⑥山田さんは昆虫類の研究をしている。
- ⑦田中さんはいつも芸術家風の帽子をかぶっている。

図 2. 熟語検索課題

漢字語彙には既習の漢字と未習の漢字が含まれる。また、『新漢英辞典』の他に、調査者が用意した和英辞典の使用も認めた。

3.1.3 観察方法

調査対象者の検索行動を、特に、学習者の手の動き、使用辞書の閲覧ページ、課題用紙への書き込み行動に焦点をあてて、ハンディ型ビデオカメラで録画した。また、課題終了後、録画したビデオテープを見せて、検索行動の不明の点や理由をインタビューし、それも録音した。事後インタビューは、書き起こして文字データとした。

3.1.4 分析項目

上述の観察方法によって得たデータを、使用辞書の種類、検索方法の種類、検索回数、つまりきの乗り越えの観点から分析した。

使用辞書は表 1 に示したように『新漢英字典』と“Progressive Japanese-English Dictionary”の 2 種類である。

検索方法の種類は、使用した辞書の索引によって以下の 3 種類である。

i) S K I P ii) 部首 iii) 音訓

S K I P とは『新漢英字典』が採用している、字型式検字法 (System of kanji indexing by patterns) のことで、部首の知識がなくても検索できる。まず、字形の特徴から字形要素の構成パターンを左右型、上下型、囲

み型、全体型の4つに大別し、パターン番号を付与する。さらに各字形要素の画数によって、2種類の枝番号を付与し、それらの番号によって字形索引で検索する方法である(鈴木・伊藤1999b)。

検索回数は、単漢字課題の場合は字形を分析し、検索方法を決定し、索引から記載ページを探し、該当ページを探す一連の行動を、達成・不達成にかかわらず一回の検索行動とした。したがって、一度決定した検索方法で達成することができず再度検索を試みる場合は、検索方法の変更の有無に関わらず、その都度一回の検索行動として数えた。また、熟語検索では、単漢字検索過程に加え、熟語の構成を分析し、文脈と意味との照合を行う過程も加えて、一回の検索行動とした。

検索行動が不達成のものをつまずきとして数えた。達成とは、単漢字・熟語課題に正しく答えることである。したがって、SKIPや部首の認識が正しくなくても、相互参照を見て検索できた場合も、達成したものと分類した。相互参照とは、分類(SKIP・部首)を間違いやすい漢字に、正しくない分類からでも検索できるように設けた索引である。

つまずいた場合、その乗り越えの方法を、同じ検索方法を続けるか、検索方法を変更するかに着目して分析した。検索方法の変更には2種類の分類を設けた。1つは先に挙げたSKIP、部首、音訓の3種類の検索方法の中で、前にとった方法とは異なるものを試みる場合である。例えば、SKIP検索から、部首検索に変更する場合で、使用する索引を変更するものとして分類した。もう1つは、検索方法の種類は同じであるが、検索の手がかりを変更する場合である。例えば、SKIP番号を数え直したり、部首要素を別の部分に想定した場合で、同じ索引の中での変更として分類した。

4. 結果と考察

4.1 初級者の課題達成の状況

表2に示すようにAとBは達成の状況が異なる。Bに比べてAの方が達成できたものが単漢字課題と熟語課題でそれぞれ一題ずつ上回っている。また、総検索数に占めるつまずきの割合がBは63.8%であるのに対し、Aは48.6%と少ない。さらに、Bは約1時間10分を課題の達成に要したのに対し、Aは約42分と少ないことから、Aのほうが達成度が高いと言える。

表2. 学習者 (A・B) の課題達成状況 (達成数・検索回数・時間)

	A	B
達成した単漢字課題数/総数	8/8(100%)	7/8(87.5%)
達成した熟語課題数/総数	10/11(90.9%)	9/10(90%)
つまずいた検索回数/総検索数	17/35(48.6%)	*30/46(63.8%)
課題 (単漢字+熟語) 所要時間	42分20秒	*1時間10分 9秒
1 検索平均所要時間	1分12秒6	*1分31秒5

*達成が無理と判断し、調査者が中止するように指示したのものも含まれ、その場合は中止の時点までの時間を計算した。

Bは母国での日本語研修歴があり、研修コースの中でも既習者対象のクラスに在籍したが、この結果から見ると、Aに比べて漢字辞書使用の習熟度が低いことがわかる。

4.2 初級学習者のつまずきとその乗り越え方

AとBに見られた特徴を以下にあげる。

(1) 単漢字検索におけるつまずきの乗り越えを表3に示す。

表3. 初級学習者の単漢字検索におけるつまずきの乗り越え方

学習者	つまずき (回数)	つまずきの乗り越え方 (回数)		
		検索法を変更 せず、繰り返 す	同じ索引の中で、 画数やパターンを 少し変更して検索	使用する索引 の変更
A	5	1	0	4
B	17	2	8	7

Aはつまずきの場合、使用する索引を変更して検索するのが5回のうち4回と割合が高かった。一方、Bはつまずきの回数がAより多く、その乗り越え方として、最も多かったのは同じ索引の中で画数や部首成分を少し変更して検索する乗り越えの試みであり、ついで、使用する索引を変える、同じ検索法を繰り返すという方法が多くとられた。このことから、Aはつまずきを乗り越えるために、使用する索引を変更する割合がBよりも高かったと言える。これはAのほうが一度採用した検索方法の正当さについての判別ができるということを示すと言える。また、Bが同じ索引の中のス

キャンニングの範囲を広げることで、時間を費やしてしまったのは、検索方法のどこがつまずきなのか正確に把握できないためであると考えられる。

(2) 熟語検索で共通して見られたつまずきを表4に示す。

表4. 初級学習者の熟語検索におけるつまずきの乗り越え方

学習者	つまずき (回数)	つまずきの乗り越え方 (回数)		
		検索法を変更せず、繰り返す	同じ漢字を同じ索引の中で、画数やパターンを少し変更して検索する	使用する索引、あるいは、検索する漢字を、熟語中の別の漢字に変更する
A	12	3	1	8
B	13	0	8	5

Bは熟語検索においてはつまずきの回数がAとあまり差がなくなっている。これは、単漢字検索課題が、形態要素の分離が難しいものを出題していたことに対し、熟語検索課題では、形態要素の分離が比較的容易なものであったり、既習漢字を含む熟語を出題したことによると考えられる。

AとBに共通して見られたつまずきは熟語「芸術家風」を、「芸術／家風」のように語構成を誤って認識したため、文脈に適切な訳語が得られなかったことである。「芸術」の訳語が“art”、「家風」の訳語が“family tradition”とそれぞれ辞書に記載されていたことから、つまずきが自覚されず、乗り越える方策はとられなかった。

また、Aにのみ見られたつまずきは、熟語「無資格」の検索において最初「無資」という熟語を想定して検索するものである。

Bは単漢字検索においてと同様に熟語検索においてのつまずきの乗り越え方は検索方法の変更によるものは少ない。

(3) 熟語検索課題において、Bは単漢字検索上のつまずきをひきついでいた。しかし、Bは意味と文脈の照合を意識的に行っていたことが、事後インタビューのプロトコルに現れている。以下のプロトコルは、事後インタビューでBに熟語課題の「無資格」の「資格」の意味をどうやって決定したかについて調査者が尋ねている部分である。

(B: 調査対象、R1: 調査者)

R1: どちらが、qualification と competence と capacity と、どの意味に
考えました?

B: 前は、without capacity だった。あと、これを読んだから、「あの人」、
qualification のほうが良いと考えた時。

R1: あー。

「資格」の訳語を決定する時、「前は、without capacity だった」と言ったのは、一度は“capacity”の訳をあてたことを意味する。さらに、「これを読んだから」とBが言ったのは、課題文の「あの人は無資格なのに学校で教えています。」を読んだことを意味する。つまり、「学校で教えている」という文脈と訳語を照合し、職業的な資格を意味する“qualification”のほうが適当であると決定する方策が現れている。

(4) Aは検索行動をメタ認知していることが見られた。例えば、SKIPの4(全体)型は間違えやすいと認識し、索引ページの4型の項目をスキップすることを乗り越える方策としていることが、以下のインタビュー記録に見られた。

A: 4番いつもはちょっと難しい。だから、4番いつも最後探しています。

(中略) the classification for four are not so much. So, for me sometimes it's very easy, not know exactly the count of strokes, but, only an approximate count. So, I can go to the four and look by myself, look in the list. (調査者訳: 4型の分類はそれほど多くない。だから、画数を正確に知らなくても、だいたい画数さえわかれば、とても簡単なきがある。だから、4型(の索引)へ行って、(索引の)リストを見る。)

以上の結果、初級レベルにおいて、漢字検索の達成度の高い学習者は

- 1) 検索法を変えて乗り越えようとする
- 2) 漢字検索をメタ認知している

ことがわかった。これは、検索法の正否について正しい判断が下せるため、新しい検索法に移ることができることを示していると言える。

一方、単漢字検索で習熟している学習者が、語構成や文脈との照応を要

する熟語検索において成功するとは限らない例が見られた。

5. 調査2：レベル間（初級・上級）の差違

漢字辞書使用ストラテジーの差違を初級者と上級者との間で考察するために、上級者に対して初級者と共通の単漢字検索・熟語検索課題を課した。さらに、上級者に対して日本語から母語への翻訳課題を課し、辞書を使用した検索行動を観察した。単漢字と短文中の熟語検索課題は、上級者が研修コースで教材として採用している『新漢英字典』の字形検索法（SKIP）に慣れていないことと、既習の漢字がほとんどであったことから漢字辞書使用ストラテジーの観察があまりできなかったので分析から除外し、翻訳課題における検索行動のみを分析の対象とする。本稿で中級者を調査対象としないのは、初級を終了し、日本語学習を継続しているものでも、その後の日本語学習状況によって進度が異なるため、一概に中級というレベルを設定することが困難であったことによる。

5.1 調査の対象

タイ語を母語とする上級日本語学習者3名を対象とした³⁾。学習者はいずれも、タイ国の大学で日本語を専攻している。調査時にXとYは滞日半年経過しており、Zは前回も含めると1年半の滞日歴がある。3人とも、日本語日本文化研修コースの上級クラスに在籍していた（表5）。

表5. 調査2の調査対象者のプロフィール

学習者	日本語学習歴	備考
X・Y	タイ国の大学で3.5年・日本で0.5年	
Z	日本の高校にAFSで1年留学・タイ国の大学で3.5年・日本で0.5年	日本語能力試験2級合格

5.2 課題

約250字の説明文（図3）を母語に翻訳する。課題文の語彙の程度は、級外29.8%、1級8.3%、2級28.6%、3・4級33.3%である⁴⁾。未習語を多く含む学習者の専門外の文章を翻訳課題にしたのは、多肢選択による理解課題よりも詳細な検索行動を引き出すためである。課題文中の漢字語彙の検索行動を調査の分析の対象とし、カタカナ表記の語彙の検索行動は

分析対象から除外した。

化学物質過敏症 殺虫剤や除草剤、シロアリ駆除剤、ホルムアルデヒドなどなど建材に使われる物質、芳香剤やたばこの煙、排ガスといった化学物質を大量に体内へ取り入れた結果、体が「過敏性」を獲得、暴露したさまざまな化学物質に反応、発症する。いったん過敏性を獲得すると、以後は超微量の科学物質にも反応するようになる。さらに花粉や動物の毛、ダニ、カビなどいわゆる化学物質以外の物質も原因になる可能性もある。環境病の一つともいわれ全国的に増加傾向にある。病状は倦怠感、頭痛、不眠、めまい、吐き気、鼻炎、精神の不安定、というように多種多多彩。

図 3. 翻訳課題文

5.3 使用辞書

学習者の通常使用している電子辞書のほか、調査者が準備したものも使用した (表 6)。

表 6. 調査課題での使用辞書

学習者	電子辞書	漢英辞書①/②	和英辞書③	日タイ辞書④
X・Y	○	○(①)		○
Z	○	○(②)	○	

使用辞書：

電子辞書：ワードタンクスーパー IDX-9500 (キャノン社製)。英和、国語、和英、漢和辞典の 4 機能がある。また、英和、国語、和英辞書で意味や例文中に表示された語をジャンプ機能を使用して、他の機能の辞書に切り替えることができる。

漢英辞書：① “Kodansha's Compact Kanji Guide” (講談社)

② 『新漢英字典』 (研究社)

和英辞書：③ “Progressive Japanese-English Dictionary” (小学館)

日タイ辞書：④ コーサー・アリヤ編 『日タイ辞典』

5.4 観察方法

調査対象者の検索行動をビデオカメラで録画した。また、課題終了後、録画したビデオテープを見せて、事後インタビューを行い、録音した。

6. 調査2の結果と考察

上級学習者は漢字語彙検索においてのつまずきを以下のように乗り越えていた。

表7. 上級学習者の漢字語彙検索におけるつまずきの乗り越え方

学習者	つまずき (回数)	つまずきの乗り越え方 (回数)		
		検索法を変更 せず、繰り返 す	同じ索引の中で、 画数やパターンを 少し変更して検索	使用する索引、 あるいは辞書の 種類の変更
X	8	0	1	7
Y	12	0	0	12
Z	9	0	3	6

表7に示されるように、上級者はつまずきに対して、使用する索引や、辞書を変更することで乗り越えていた例が多い。

課題の達成度については、タイ語に訳された文（付録を参照のこと）を調査者らと1名のタイ語母語話者が比較検討し、3人の課題の達成度にほとんど差がないと判定した。そこで、3人の上級学習者が示した検索行動と漢字辞書使用ストラテジーを以下に記述する。

6.1 上級者の漢字辞書使用

学習者別の辞書使用と検索方法を表8と表9に示す。

表 8. 上級学習者の辞書使用 (学習者・検索方法別)

学習者		X	Y	Z
電子辞書使用歴		不明	6ヶ月	4年
電子辞書使用回数／総検索回数 (%)		7/24 (29.3%)	12/18 (67%)	27/29 (93.3%)
音訓 検索	(電)国/和英	5	6	16
	(電)漢和 (音訓)	1	6	4
	(電)英和	0	0	0
	漢英(コンパクト/ 新漢英)	8	0	2
	日タイ	5	1	0
	和英	0	0	0
部首・ 総画	(電)漢和	1	0	7
	漢英(コンパクト)	5	5	0

表 9. 上級学習者の電子辞書使用におけるジャンプ機能の使用回数

学習者	X	Y	Z
ジャンプ機能使用回数	3	0	2

表 8 からは、上級者でも、辞書選択に個人差があり、電子辞書を最も長く使用している Z が電子辞書を選択する傾向が見られる。また、表 9 にあるように、ジャンプ機能の使用についても個人差が見られた。

また、読み方のわかる漢字熟語の検索に際しては、和英 (電) を主に使用し、国語 (電)、漢英①②、和英③、日タイ④を補助的に使用した。

読み方のわからない漢字熟語の場合は次の 2 つの漢字検索行動が見られた。

- 1) 漢和 (電) ①②の部首索引と総画索引から検索。
- 2) ジャンプ機能の活用：読み方がわかる漢字を含む語彙を国語辞書 (電) で検索したあと、語彙の中の単漢字を指定して漢和辞書 (電) にジャンプし、当該熟語を検索する。ジャンプ機能を使うと、音訓・部首・総画索引からよりも早く検索できることを、学習者は利点として認識していることがうかがえる。

例. 「過敏」を検索するため国語 (電) で「過去」を検索し、「過」の

字から漢和（電）にジャンプし、「過敏」を検索した（X）。

また、以下の事後インタビューのプロトコルに、読み方がわかる漢字を手がかりに検索するストラテジーの使用が見られる。

（略号は発話者を示す。X：学習者、R 1・R 2：調査者）

R 2：まず、一番最初に引いたのがたぶん「過敏」かな。

X：はい。「過敏」、「すぎ」。

R 2：これ、一番最初の漢字は、「過ぎ」って言ってました。

X：はい。

R 2：で、「過敏」、「か」で引いたんでしたっけね。

X：「すぎる」

R 2：「過ぎる」で引いて

X：はい

R 2：「過」の漢字を出して、それから、熟語を探したんですね。

X：はい。

このように、熟語全体としての読み方がわからないというつまずきへの対処には、音訓・部首・総画索引よりもジャンプ機能を選択し、時間と労力を節約しようとする試みがみられた。個々の漢字の検索活動の効率化を図ることは、語句の意味を統合して文を解読し、翻訳するという課題達成のために合理的な措置であるといえる。

6.2 上級者の漢字検索上の問題点

上級者は以下の点でつまずいた。

1) 漢字の形態認識の間違い

例。「微」を「微」と間違えた（Z）。

2) 漢字熟語の語構成認識の間違い

例。「超微量」から「微量」を分離できず、「超微」「超微量」を検索した（Y）。

これらの例はあったものの、漢字パターン、画数、読み方の誤りや、語構成上の認識の誤りは少なく、検索不達成のものは少数であった。

また、辞書の構造と記載内容に起因する問題点が以下のように見られた。

1) 親字が語頭にある熟語を項目としているため、語頭の漢字が検索できなければ不達成となる (漢和 (電)、漢英①)。

例、「倦怠感」を検索する際、「倦」が常用漢字ではないため、漢英①には掲載がなかった。次に「怠」を検索したが、「怠」から始まる熟語しかなかった (X)。

2) 当該熟語が辞書に記載されていない。

例、「発症」の記載がなかった (漢和 (電)、国語 (電)、漢英②)。

3) 音訓索引が部首順に配列されているため、見落としや放棄の原因となった (漢和 (電)、漢英①)。

6.3 文脈と意味の照合

調査では、上級学習者はほとんどの場合、文脈と照合し、整合する訳語を選定した。そのため、上述のつまずきがあっても、翻訳課題全体の訳の意味を損なうようなことはなかった。特に以下は文脈と訳語の整合性が重視された例である。

辞書に記載された訳語が文脈に適當ではないと判断した場合は、記載された意味を採用せず、別の辞書を検索しなおしたり、適当な訳語をあてたり、その語の訳を省略する例が見られた。例えば、「倦怠」は日タイ④の 'kaan-bua-naai (あきあきする)' という訳を採用せず、辞書にない 'oon-phlia (無力の)' を採用した (X)。

また、当該熟語が辞書中で検索できなかった場合、一字ごとの漢字の意味を考慮して訳語を考え出す例が見られた。例えば、「発症」の記載がなかったため、一字ごとの漢字を漢英①で検索し、'tham-hai-khat-rook (病気をおこさせる)' と訳した (Z)。この部分に関する事後インタビューのプロトコルには、辞書に当該語彙の記載がないことを乗り越えるストラテジーが示されている。

(略号は発話者を表す。Z：調査対象者、R1・R2：調査者)

R2：これ「発症」調べてたのかな (ビデオの画面を示しながら)。

Z：はい、なかった。

R2：なかったですね。

「発症」調べて、無くて、「症」を調べて、無くて。

Z：「症」、この辞書になかったんですよ。でも、「症」だけ。

R 2 : 「症」だけ調べて、で、こっちから。

Z : はい。

Z : 新しい言葉ですか？

R 2 : そうではないですよ。 「発症例」とか使うから。

R 1 : 医学。

R 2 : 医学用語かもしれない。症状が出るっていう意味。例えば何か病気になっても、症状が出ない時ありますよね。でも、症状が出た時が発症。

Z : ああ。で、この意味全部訳してないんですよ。

R 1 : タイ語でも難しい。

Z : そんなことはないですよ。

でも、日本語がなかったの。

R 2 : これ、「はつ」の方で調べて出て来ました？ 「症」で調べました？

Z : 「発」調べた時。

R 2 : なかった。

Z : 「発症」。

R 2 : なくて、「症」もう一度調べ出てたんだ。

Z : はい。

R 2 : 「発」を調べてないんですよ。で、次に「症」を調べて、出てた。

R 2 : じゃ。次にね、「症」を調べるんですね。

R 2 : あ、そうか。読み方もう一度確認したんだ。

この読み方を確認。それで、それ調べて、くっつけた、こうかな？

これらの検索行動の中で電子辞書使用の習熟度は個人差が見られた。電子辞書使用歴が一番長く、習熟度も高かったZが他の辞書を使用したのは、電子辞書に記載のない語彙の検索のためと、電子辞書で検索した訳語を文意と整合させるためにさらに他の訳語の候補を探す場合であった。一方、XとYは電子辞書にZほど習熟していなかったことと、母国でも同じものを使用していたことから、音訓・部首・総画索引で検索する場合は漢英辞書①を使用するが多かった。

7. まとめ

以上の調査結果から、初級学習者の中で漢字辞書使用に習熟したものは、

次の漢字辞書使用ストラテジーを使用していることが明らかになった。

1) 使用する索引を変えて乗り越えようとする

2) 漢字検索をメタ認知している

語彙と読解力の限られた初級者の場合、単漢字を形態の手がかりで検索することに習熟したAが、文脈を照合して意味を吟味するストラテジーを使用していなかったことから、文脈との照合という漢字辞書使用ストラテジーは必ずしも積み上げ式に獲得されるものではなく、むしろ、総合的な日本語能力によって促されるものであることが示唆される。

また、初級学習者と上級学習者を比較すると、上級者に特徴的に使用された漢字辞書使用ストラテジーは以下のものであった。

①読み方がわからない漢字熟語でも、読み方のわかる漢字を手がかりにして検索し、より早く簡便と思われる辞書機能を活用する方法をとっている。

②電子辞書、英和辞書、漢英辞書、日タイ辞書など複数の辞書を使いこなして、つまずいた場合にも、辞書の掲載語彙数の限界を見極めている。

③適当な意味を検索するために文脈と意味の照合を重視する。そのため、辞書の記載事項をそのまま採用せずに、複数の辞書を使用して確認したり、熟語を構成する漢字一字ごとの意味を考慮して意味を案出する。

このように、上級者の漢字検索ストラテジーは辞書使用の習熟と、文脈の重視が特徴的である。

今回の調査で得られた知見から、初級学習者の漢字学習に際し、以下の示唆を導くことができよう。

i) つまずきに対して、一つの検索法をくりかえして時間を費やさないように、字形・部首・読み、などいろいろな検索法を試みることができるように、習熟度を高める。

ii) 漢字辞書使用のメタ認知を促すため、学習者が漢字辞書使用を振り返る機会を学習時間内に設ける。

iii) 辞書の構造の異なるものも紹介し、多様な辞書が使用できるようにする。

8. 今後の課題

今後の課題としては以下の点が挙げられる。

- 1) 上述のiii)については、データ採取後の1999年4月期より、電子辞書を副教材として選定し、『新漢英字典』と併用しているので、その使用実態を調査したい。
- 2) 今回の調査では、初級者と上級者に課した課題は質が異なっており、一概に結果を比較することには問題が残されている。課題を均質化することが必要である。
- 3) 漢字辞書使用ストラテジーの獲得の段階的な発達を見るためには、今回の調査からは除外された中級学習者を調査の対象とする必要があるう。
- 4) 漢字辞書使用ストラテジーが、漢字学習にどのような効果を与えているかを検証する必要がある。
- 5) 事後インタビューでは上級者は日本語、初級者は英語と日本語を媒介語として使用した。しかし、学習者によって媒介語の能力に差があり、インタビュー時に詳細に語るができなかった可能性がある。また、母語の違いにより熟語、語構成認識に差が出る可能性も否定できない。このような要素が調査結果、分析結果に影響をあたえないよう方法を検討したい。

注：

- 1) 本稿は2000年3月、及び、2000年9月に日本語教育方法研究会において発表（伊藤・鈴木 2000a,b）したものを修正、加筆したものである。
- 2) 学習者は教材として購入し、授業で使用方法について学習している。
- 3) タイ語母語話者を調査対象にしたのは、非漢字圏の上級学習者であることと、調査者らがタイ語を解するので、翻訳の達成度を判定できるからである。
- 4) 語彙レベルの判定にはインターネットの「辞書ツール」（川村・北村・保原，2000）を使用した。

課題文出典

総合社編『情報知識 imidas1999』（1999）集英社

使用辞書

漢英辞書：“Kodansha's Compact Kanji Guide”（講談社）、『新漢英字典』

(ハルペン・ジャック編、研究社)

和英辞書：“Progressive Japanese-English Dictionary”（小学館）
日タイ辞書：コーサー・アリヤ編『日タイ辞典』（タイ国教師会）
電子辞書：ワードタンクスーパー IDX-9500（キャノン社製）

【参考文献】

- 伊藤早苗、鈴木正子（2000a）「初級学習者の漢字辞書使用の事例研究一つ
まづきを乗り越える方策は何かー」『日本語教育方法研究会誌』
Vol.7 No.1 pp.12-13.
- 伊藤早苗、鈴木正子（2000b）「上級学習者の漢字検索についてー翻訳課
題における辞書使用ー」『日本語教育方法研究会誌』 Vol.7 No.2
pp.24-25.
- 伊藤早苗、鈴木正子（2000c）「初級学習者の漢字辞書使用についてー漢字
熟語検索における問題点ー」『北海道大学留学生センター紀要』 4号、
北海道大学留学生センター、pp.38-57
- 大北葉子（1995）「漢字学習ストラテジーと学生の漢字学習に対する信念」
『世界の日本語教育』 5号 pp.105-24
- オックスフォード、レベッカ・L. 著 宍戸通庸・伴紀子訳（1994）『言
語学習ストラテジー』 凡人社
- 川村よし子、北村達也、保原麗（2000）『日本語読解学習支援システムリ
ーディングチュウ太』 <http://language.tiu.ac.jp>
- 鈴木正子、伊藤早苗（1999a）「初級日本語学習者の漢字辞書使用について
ー単漢字検索ー」『日本語教育方法研究会誌』 Vol.6 No.2 pp.24-25.
- 鈴木正子、伊藤早苗（1999b）「初級日本語学習者の漢字パターン認識に
ついてー単漢字検索における問題点ー」『北海道大学留学生センター
紀要』 3号、北海道大学留学生センター、pp.89-113
- 中村重穂（1997）「日本語学習者の漢字学習ストラテジーに関する調査と
考察」『日本語教育研究』 第33号 pp.107-22 言語文化研究所
- 柳町智治（1999）「辞書検索能力を養成する初級漢字クラス：新たな『漢
字 proficiency』の提唱」『日本語教育方法研究会誌』 Vol.6 No.1
pp.32-33.
- 横須賀柳子（1999）「語彙及び漢字学習ストラテジーの研究」宮崎里司・
J. V. ネウストプニー編『日本語教育と日本語学習』 ころしお出版

- Oxford, R. (1990) *Language Learning Strategies*. New York: Harper Collins.
- Yanagimachi, T. (1999) A functional kanji syllabus for beginning-level learners: Promoting and evaluating kanji proficiency. In Makino, S.(ed.), *The Proceedings of the Seventh Princeton Japanese Pedagogy Workshop*, pp.83-96. Princeton, NJ: Princeton University, Department of East Asian Studies.

謝辞

本研究をすすめるにあたって、貴重な時間を提供し忍耐強く調査に協力してくれた学習者各位に感謝します。また、中村重穂助教授、紀要編集委員の方々から多くの助言をいただいたことに感謝します。すべての助言を容れられなかったのは調査者の責めに帰するところです。

いとう さなえ (留学生センター非常勤講師)
すずき まさこ (札幌大学非常勤講師)

付録. 上級学習者 X・Z の翻訳課題

X ผลจาก การที่ สาร ที่ ไซ ใน วัสดุก่อสร้าง ที่เป็น โม อย่างเช่น บายาแมลง
 結果 -から [NOM] ◯ ◯ の [NOM] 使う 中 建築材料 [NOM] [COP] 木 例え ば 殺虫剤
 ยาปราบวัชพืช ยากำจัดปลวก และ formaldehyde หรือ น้ำยาดับกลิ่น และ ควันบหรี
 除草剤 シロアリ駆除剤 そして あるいは 消臭剤 して たばこの煙
 หรือ สารเคมี ที่เป็น ก๊าซพิษ เป็น จำนวนมาก เข้าส รางกาย รางกาย จะ เกิด ความ
 あるいは 化学物質 [NOM] [COP] 毒ガス [COP] 多量 に入る 体 体 [AUX] 生じる [NOM]
 อ่อนแอ และ มี ปฏิกิริยา ต่อ สาร เคมี ต่างๆ ขึ้นมา เมื่อ รางกาย เกิด ความ
 弱い して 反応がある -に対して 様々な化学物質 ~ようになる [NOM] 体 生じる [NOM]
 เอนแอ ต่อไป ก็ จะ เกิด ปฏิกิริยา ต่อ สาร อื่นๆ ทางวิทยาศาสตร์ เพิ่ม มาก ขึ้น
 弱い あとで も [AUX] 生じる 反応 -に対して 様々な物質 科学的な 増加する
 ยิ่ง ไป กว่า นั้น สาร อย่างอื่น นอกเหนือไปจาก สารเคมี อย่างเช่น เกสรดอกไม้ ขนสัตว์
 さらに それより 物質 他の種類 ~以外の 化学物質 例え ば 花粉 動物の毛
 เห็บ และ ไร ก็อาจ เป็น สาเหตุ หนึ่ง ได้ มี แนวโน้ม ที่ โรคแพ้ สิ่ง แวดล้อม นี้ จะ เพิ่ม
 ダニ して カビ も [AUX] [COP] 原因 一つ 傾向 [NOM] 環境病 これ [AUX] 増加
 ขึ้น อีก โดย ทั่วประเทศ อาการ ต่างๆ ของ โรคนี้ คือ **อ่อนเพลีย** ปวดศีรษะ
 全国的に 症状 様々 [NOM] この病気 [COP] **「倦怠感」**の訳 頭痛

นอนไม่หลับ เวียนศีรษะ คลื่นไส้ คัดจมูก และ กระวนกระวาย
 不眠 めまい 吐き気 鼻づまり して 精神の不安定 (焦る、揺れる)

Z “โรคที่ รัลิกไว ต่อ วัสดุ ทางด้านเคมี”
 病気 [NOM] 感じやすい -に対して 材料 化学的な

ผล จาก การที่ วัสดุ ที่ ไซกัน เช่น วัสดุก่อสร้าง เช่น บายาแมลง บายาแมง
 結果 -から [NOM] ◯ 材料 [NOM] 使う 例え ば 建築材料 例え ば 殺虫剤 除草剤
 กำจัดปลวก สาร กำพวดฟอร์มาลีน หรือ วัสดุ ทางเคมี อย่างเช่น แก๊ส เขาไปใน
 シロアリ駆除剤 物質 ホルマリン類 あるいは 材料 化学的な 例え ば ガス 入る

ร่างกาย เป็น ปริมาณมาก ทำให้ ร่างกาย ได้รับความ รัลิกไว ต่อ วัสดุเหล่านี้
 体 [COP] 大量入る させる 体 受ける [NOM] 感じやすい -に対して この種の材料

เมื่อ ท้าปฏิกิริยากับ สิ้นค้าทางเคมี ต่างๆ ที่ มีผลร้าย จะ **ทำให้เกิด โรค** 2-2
 体 反応する 化学的な物 様々な [NOM] 凶悪な効果のある [AUX] 生じさせる 病気 「発症する」の訳

ถ้า ได้รับ การ ตอบรับ ที่ ไร แล้ว ก็ จะ ตอบสนอง ต่อ วัสดุ ทางด้านวิทยาศาสตร์
 もし 受ける [NOM] 反応 [NOM] すでに感じた [AUX] 反応する -に対して 材料 科学的な

ที่มี ปริมาณน้อยมาก ในภายหลัง ได้ ยิ่งกว่านี้ ยัง มีความ เป็นไปได้ ที่ สาเหตุ จะ
 [NOM] 超微量の あとで 受ける これ以上に さらに ある [NOM] 成りうる [NOM] 原因 [AUX]

เกิดจาก วัสดุ นอกเหนือจาก วัสดุ ทางด้านเคมี เช่น เกสรดอกไม้ ขนสัตว์ เชื้อโรค
 ~生じる 材料 ~以外に 材料 化学的な 例え ば 花粉 動物の毛 ばい菌

แบคทีเรีย จัดเป็น โรค ที่ ป่วย ทางสิ่งแวดล้อม และมี แนวโน้ม ว่า จะ มีเพิ่มขึ้น
 バクテリア 成りうる 病気 [NOM] 病気 環境の して いる 傾向 2-1 [AUX] 増加する

ทั่วประเทศ อาการป่วย จะ หลากหลาย อาการ ดังเช่น **ปวดเมื่อย** ปวดศีรษะ
 全国 [NOM] 原因 症状 [AUX] 様々な 症状 例え ば **だるい** 頭痛

นอนไม่หลับ ตาลาย อาเจียน คัดจมูก ความ รัลิก ไม้มี ทางประสาท
 不眠 めまい 吐き気 鼻づまり [NOM] 感じる [NEG] 精神の **「倦怠感」**の訳

Strategies in using kanji dictionaries by
learners of Japanese:
Case studies of learners at beginning and advanced levels

ITO Sanae • SUZUKI Masako

The purpose of this study is to find out how learners of Japanese use strategies in using kanji dictionaries. The researchers defined strategies in using kanji dictionaries as strategies of learning kanji. Focusing on dealing with difficulties in looking up kanji, the cases of learners at beginning and advanced level are studied. .

Beginning learners of kanji were assigned the task of looking up unknown single kanji and kanji compounds in the kanji dictionary, and advanced learners were assigned the task of translating a Japanese text which included unknown words into their native language. The search processes were recorded on video and follow-up interviews were video- and tape recorded. To find out the difference of strategies used by beginning-level learners, two learners whose performance in looking up kanji were contrastive were focused. In addition, the feature of strategies used by advanced-level learners was investigated. Findings were that (1) the strategies used by the high-performing beginning-level learner were to change the way of looking up kanji frequently, and to recognize the use of kanji dictionary metacognitively; and (2) advanced-level learners looked up kanji using readings as clues, using several dictionaries including electronic dictionaries, and attaching importance to checking meaning and context.